第三十五回武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

選者 金子千侍

特選

一席 夜神楽や神話いきいき現はるる　杉並区 太田順子

二席 大焚火背中同志で初日まつ　青梅市 原島康典

三席 登り来て御岳神社に春の汗　昭島市 山田庫夫

四席 〆飾る大樹は神と幾百年　沼田市 伊佐大蔵

五席 御嶽山尺取虫と登りけり　西東京市 白瀬召子

秀逸（出句順）

御神木仰ぐ冬帽磴の道　さいたま市 忍足貴代子

春山や馴染みの溜まる茶店かな　新座市 長谷川栄

玉堂の墨絵の世界霧深し　青梅市 阿部秋水

神舞のかがよふあかり遠河鹿　日の出町 渡邊敏雄

神の留守神代欅の仁王像　西東京市 髙橋キヨ子

邯鄲の鳴きやみ闇を深くせる　中野区 辰巳行雄

打水や白蝶風を連れて来し　多摩市 橋本宏子

口笛の風となりゆく夏木立　沼津市 近藤昭三

鵙高音訛とび交ふ足湯かな　多摩市 萩生田芳孝

巫女舞の姉妹笑顔の汗を拭く　青梅市 津布久信雄

佳作（出句順）

春鷹の翼も美しき御岳山　あきる野市 岩谷天津子

神の山御師の館とかたくりと　飯能市 浅野光明

足元のあぶを払ってとろろめし　相模原市 佐藤敏行

宿坊の黒き柱に夏兆す　横浜市 花里典広

神木の風の梢へ小鳥来る　新島村 曽根新五郎

餅投げて山の夜神楽果てにけり　府中市 奥山源丘

新涼の風引き入れて大神楽　日高市 比留間節子

千年の樹齢に東風の渡りけり　飯能市 本多多華

一川と一天のあり鷹の舞う　飯能市 森泉双輪

足早に坂ゆく襦宜の息白し　青梅市 中村ゆき子

応募総数　五五〇句

選者吟

松蟬や山の閑けさ寄ってくる

奉納俳句選評

一席　夜神楽や神話いきいき現はるる　太田順子

夜の闇、篝火、夜神楽の舞台装置。観る人々は、いつしか神代の世界へと誘われております。そして演じられる神話。まさに迫力ある臨場感。作者の感動は「いきいき現はるる」の絶妙な詠みに、総て表出されております。凄い作品です。

二席　大焚火背中同志で初日まつ　原島康典

大焚火を囲んで皆背炙りをしています。何処の誰かは知らないけれど、只々〝初日の出〟を拝もうと共通の目的をもった同志なのです。「背中同志」の語句が、この句の眼目で、作者の素晴しい感性に感動しました。

三席　登り来て御岳神社に春の汗　山田庫夫

「春の汗」が作品の総てを物語っております。〝汗〟に季節の形容詞を付けた言葉、〝秋の汗〟、〝冬の汗〟など詩的感動はありません。併し「春の汗」となると、暖かいロマンを感じます。かなりきつい山坂道を登り来て、やっと着いた御岳神社。ほんのりと生じた〝春の汗〟に、満面の笑顔、目的達成のなんとも言えぬ満足感を味わうのでした。

四席　〆飾る大樹は神と幾百年　伊佐大蔵

お正月の〆飾をつけたご神木の大樹。毎年毎年新しい〆飾がつけられ大樹は神を宿し、神と共に齢を重ねて幾百年の樹齢となっています。正に荘厳な神の木。一幅の絵でもあります。

五席　御嶽山尺取虫と登りけり　白瀬召子

御嶽山へ登っていると、ふと尺取虫が自分の衣について折伏しながら登っています。愛着を感ずるもので、〝一緒に登らうね〟と声をかけたくなります。この諧謔性、痛快で魅力的です。リンドバーグが大西洋を横断した時、機内にいた一匹の蠅が友達でした。

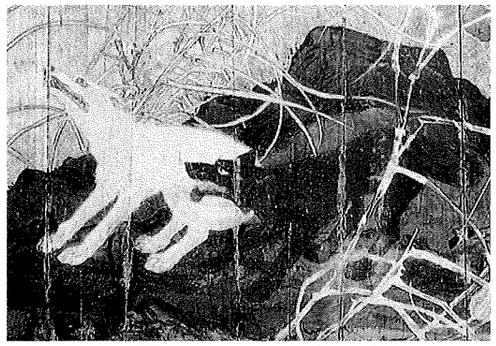
第三十六回 奉納俳句募集要項

一、作品は未発表に限る
一、受付けは指定用紙にて投句箱へとする
（郵送等直接の受付は致しません）
一、締切りは平成二十一年一月十五日
一、発表は平成二十一年三月中旬

御嶽神社あれっこれ

お狗さま・おいぬ様・お犬さま？

赤黒い肉ひだを鈍く光らせ、深淵のような口元は濃白で艶やかな牙を覗かせ裂け上がる。その眼は切れ長く、眼球は磨かれた黒曜石の様な漆黒とも、山を炎の如く染める洛陽の様な朱赤とも伝わる。姿態は痩せ細く、あばら骨を浮かせているが虚弱ではなく、しなやかで強固。その体に似つかない四肢は大地に千年も根を張る古木の持つ情調と大地の変動から生まれ出た巨岩の重圧な安定感を漂わせ、勇壮に深山を駆け廻り、隠し持つ大鷹の鋭い爪と牙で一切の厄神を引き裂く…一読すると邪鬼・悪鬼の類かと思われるでしょうが、この描写は大きな口を持ち、災厄を滅去り真の道を示すと伝わる大口真神であり、俗に「おいぬさま」と呼ばれる狼の姿をした神様です。あらゆる災厄・火難・盗難・病難・憑物等を防ぎ、ご加護いただけるとして関八州を始め、多くの信仰を集めており、狼の姿を印した神符が軒先に祀られているのをご覧になった事がある方も多いことでしょう。「お狗さま」は「狼」を神と崇めた信仰であり「おおかみ」は「大神」の意ともいわれ、猛き霊力のあるものとして畏敬されてまいりました。日本では古代より神とされ、社伝にては「日本武尊・東征の折、御嶽山の地で邪神に惑わされた時に狼が忽然と現れ、尊を導き奉って難を免れ、その狼は尊の眷属になった」とあり、其の遠征を描いた「深山跋渉の図」においても白狼・黒狼が大口真神として描かれております。お



「深山跋渉の図」狼部分

いぬ様は身近な神として信徒に迎えられ、その逸話は御師や講中に多く残り、「代参の帰路において多摩川を舟で渡り、反対岸につくとぶるぶると獣が水を振るい落とす音が聞こえた」・「お祭りの日、無人の宅内で灯明が倒れ、掛け軸が燃えていた。ところがよく見るとおいぬ様のお姿が描かれているギリギリの所で火が消えている、紙の掛け軸に火がつけばたちまち燃えてしまい家は火事になり、まかり間違えば村ごと燃えてしまう。皆はおいぬ様が守ってくださったのだと、有難く手を合わせた」などございます。又、昨年の十二月の終わり、夕刻五時をまわった頃でしょうか、本社裏の玉垣内を映し出しているモニターに二匹の狗の姿が映りました。二匹は絵図に伝わる白と黒の体色をしており、おいぬ様を祀る大口真神社裏より現れて玉垣内を見回るようにゆっくりと歩いています。驚いた神職は玉垣を見に行きましたがそのお姿はすでに無く、モニターを見ていた者の話では、何事も無く一回りすると、また大口真神社の裏の山中へお隠れなさったそうです。居合わせた神職員はお護りいただけていることに感謝し深く拝礼をいたしました。我々神職は疑う余地はございませんが、話を聞いた方しだいでは、二匹の獣は、はたしておいぬ様だったのか、ただの迷い犬だったのか、もしくは絶滅されたとされる日本狼の姿だったのかと思いを巡らせることでしょう。ただ日本人は古来より生活の中のなにげない出来事や自然の営みを神として崇め、感謝して生活してまいりました。この出来事もその心を思い起こさせるには充分すぎるほどのきっかけとなりました。皆様も日常の中におきる何気ない出来事に感謝し、神様の存在を身近に感じながら生活なさってみてください。